

【39用 語】

【先達而…せんだつて】「さきだつて」とも読む。さきごろ、先日

【秋作…あきさく】秋に栽培又は成熟する作物

【右躰…みぎてい】右のようなこと

【仕付…しつけ】農業における種まきや植え付けなどの作業

【見分…けんぶん】役人などが立ち会い検査すること、状況を査

察すること

【慈悲…じひ】あわれみ、情け

【出府…しゅつぷ】訴願や年貢上納などで江戸へ出向くこと

【39解 説】

天明三年（一七八三）七月に起こった浅間山の大噴火は、今もなお「天明の浅間焼け」として語り継がれる未曾有の大災害であり、県内各地には当時の噴火の様子や被害状況、社会の動向や風聞などを記した古文書・記録類が数多く残されている。それらの史料によると、吾妻川流域から利根川の合流点に至る村々の被害は甚大で、流失家屋一一五一軒、流死人一六二四人、田畑泥入り高五〇五五石余といわれている。さらに、土石流は利根川へ流れ込み、農業用水路である広瀬川をせき止めるなど、前橋から伊勢崎に至る流域の村々にも大きな影響を与えることになった。

本文書は、利根川中流域に位置する平塚村など七か村が、幕府代官の遠藤兵右衛門役所へ出した困窮村民の存続願いである。この地域でも七月八日の夕方まで降り続いた火山灰によって大豆や麦などが被害を受け、今後、農業を続けることも困難な状況を訴え出ている様子がうかがえる。なお、この降灰で当地域周辺ではその後耕作者のいない荒れ地（厄介地）が増加することになったのである。